

沼尻絰一郎編輯
西南太平記

四号

下

10

15

20

25

A434
6

西南太平記四編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第八回

賊軍二侯の本陣へ進撃す

并おの大山綱良其筋おいて尋問小就く

故むかふ改新かへんの政畧せいりやくふ遇あふ事ことも其そのの急漸きんぜん利害りやくと存ぞん
せむ常つとふ懐なごいに介然かえぜんたるとあるき能あたらず言いふ小洩も
れ色いろふ顕ありまと毎とふ不平ふへい又また伸吟しんぎんさるゆの十に一
て八九はちふ居をれりその然しる所以ゆゑのをもあひ何なんぞや

48-7789

蓋し鹿兒島縣の士族が往時の權威と文武の間
 不^ふ失^しと悔^くひ既^すふ西^{さい}京^{けい}北^{きた}野^の小^こ松^{しょう}原^{げん}町^{まち}に寓^あ居^まる^せ
 鹿^か兒^ご島^{しま}縣^{けん}士^し族^{ぞく}高^{こう}島^{しま}六^{ろく}蔵^{ざう}に私^し學^{がく}校^{こう}を自^じ費^ひ不^ふ
 て取^とり建^たて多^{おほ}くの金^{きん}銀^{ぎん}をのりて近^{きん}村^{そん}の百^{ひゃく}姓^{せい}共^{ども}
 へ惠^{めぐ}そ何^{なに}も多^{おほ}くと尋^{たづ}ねし者^{もの}あらずを是^{これ}に百^{ひゃく}姓^{せい}
 の貧^{ひん}窮^{きゆう}と見^みるは忍^{しの}びがごとしと言^いはれたり高^{こう}島^{しま}
 の同^{どう}縣^{けん}士^し族^{ぞく}新^{しん}納^{なつ}新^{しん}左^さ工^{こう}門^{もん}及^{およ}び大^{おほ}山^{さん}縣^{けん}令^{れい}とも何^{なに}れ
 も互^{たが}ひは通^{つう}ト合^あしといふ新^{しん}納^{なつ}に西^{さい}郷^{きやう}隆^{りゆう}盛^{せい}へ與^よこ

せし大^{おほ}山^{さん}綱^{なつ}良^{りやう}をその助^{すけ}へ拘^{こう}引^{いん}せられ高^{こう}島^{しま}六^{ろく}蔵^{ざう}
 の不^ふ平^{へい}士^し族^{ぞく}数^{すう}名^{めい}へ開^{かい}明^{めい}の急^{きゆう}務^むを議^ぎし仮^か令^{れい}他^たに
 不^ふ平^{へい}派^{はい}の暴^{ぼう}徒^とありて誤^ご解^{かい}より敢^あて兵^{へい}器^きを上^う國^{こく}
 不^ふ弄^{ろう}せしとまらる^と支^しありも猶^{なほ}能^よく之^{これ}を制^{せい}定^{てい}するに
 探^{たん}と唱^なひ同^{どう}氏^しの天^{てん}文^{ぶん}地^ち理^り小^{せう}明^{めい}りある老^{らう}成^{せい}人^{にん}と表^{ひょう}
 不^ふ飾^{しき}り内^{ない}意^いを同^{どう}縣^{けん}の士^し族^{ぞく}等^{とう}出^{しゅつ}入^{にゅう}して逆^{ぎやく}徒^と三^{さん}將^{しやう}と
 與^よこせしとう政^{せい}府^ふにても探^{たん}偵^{てい}屢^る々^し是^{これ}を索^{さく}るに高^{こう}
 島^{しま}常^{じょう}に温^{おん}良^{りやう}篤^{とく}實^{じつ}ありて軍^{ぐん}畧^{りやく}兵^{へい}学^{がく}と講^{かう}説^{せつ}し西^{さい}國^{こく}

の不平士族と同志とるせし統帥たりし

編者云く高島へ慶安年間由井正雪たる逆徒

なまを柴田九橋と一味の黨ふ加ひ屢々施し

とませし柴田九橋も是も感伏し柴田を

北條流の軍学九橋へ鎗術の師範たり各々

由井氏同志たる者ありし

高島も何う不審の筋あつて拘引とあり警察所

み連れ行れ尋問ありし答て曰く近日高島津氏

出京り候節人足間合ふ様ふし心得二三百

人の手當ふび又拙者と巡査衆張番ふ及むず張

番の儀ハ島津氏出京の節ふ願ひ度猶此節御布

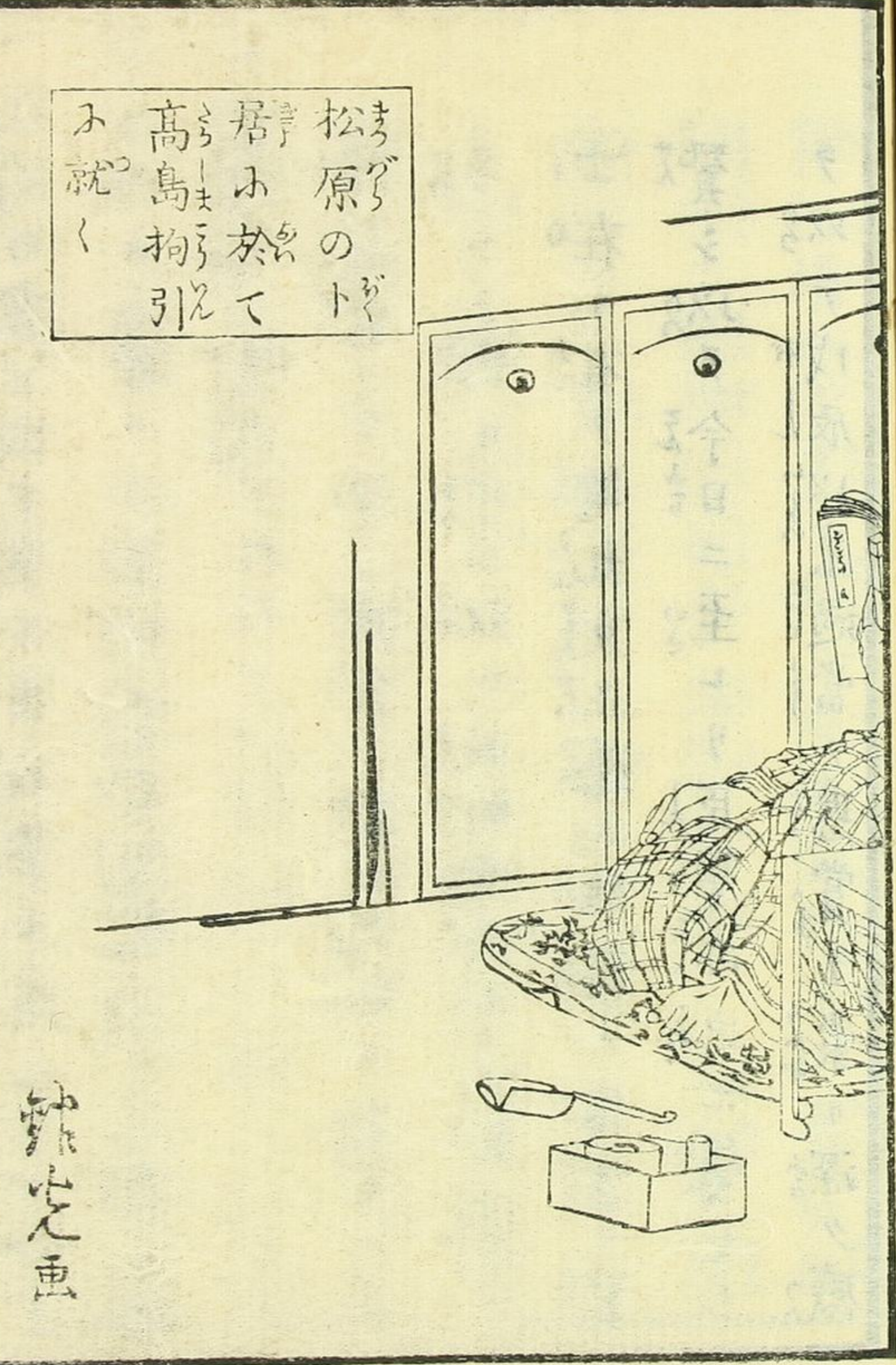
告ふ鹿兒島暴徒と之れ有り候ところ決して暴

徒ふ何れず舊士族脱走の者と云のまゝある

べし暴徒と御見倣したるの甚ど迷惑ありと大

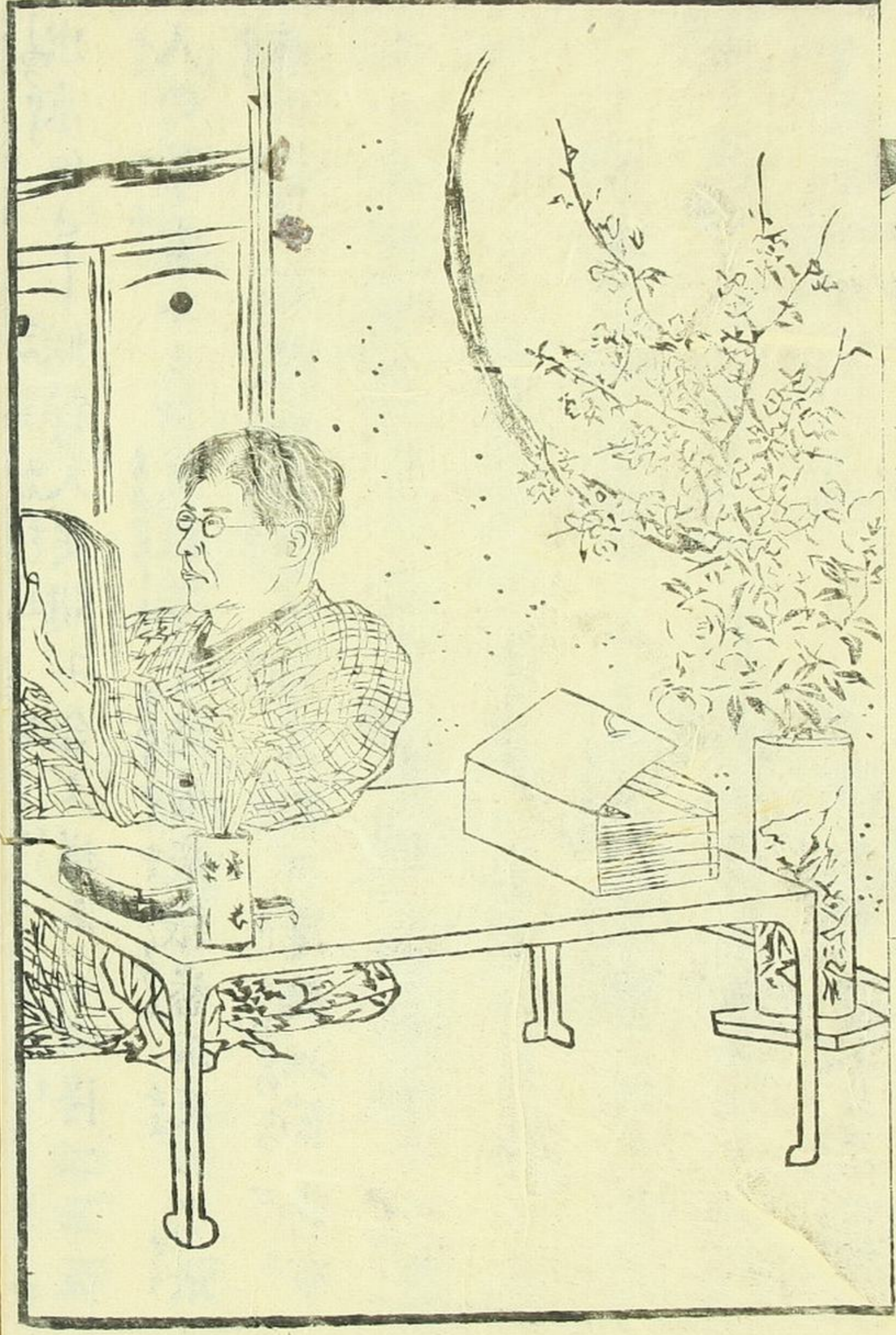
聲を放ちて申し立て自若として扱へたりと又

今般西国の乱を聞くと華族の面々の舊藩士族



松原のト
 居小於て
 高島拘引
 小就く

繪師之画



へ説諭の書と出す等の事故拳不違ふまきが如く
其の内ふ三月十日華族鷲尾隆聚公より左之通
り宮内省へ差出されたり

維新前ヨリ身ヲ國家ニ委シ大勳ヲ奏セシ臣
多シト雖中ニ就テ西郷隆盛等ノ數輩ノ
士在ル有テ撥乱反正遂ニ維新ノ偉業ヲ翼
贊シ以テ今日ニ至レリ臣等亦之ニ屬セシ
ヲ以テ戊辰以來過當ノ恩賞ヲ蒙リ深ク感

荷ニ堪ヘズ爰ニ前日鹿兒島縣下ノ暴徒征
討及ヒ西郷隆盛等位記褫奪ノ大令ヲ謹
承スルヤ實ニ隆盛ノ暴徒ニ黨スルヲ知
ル此レ何ノ深意ノ有テ然ルカ蓋シ其源
由ノ有ルアラシク臣素ヨリ之ヲ知ラス然リ
而シテ今ヤ堂々タル官軍之ヲ一撃ニ扑滅
スルハ掌ヲ措スカ如シト雖モ尙シ曠日彌
久數旬ヲ經ルニ至レハ彼我共ニ數千人

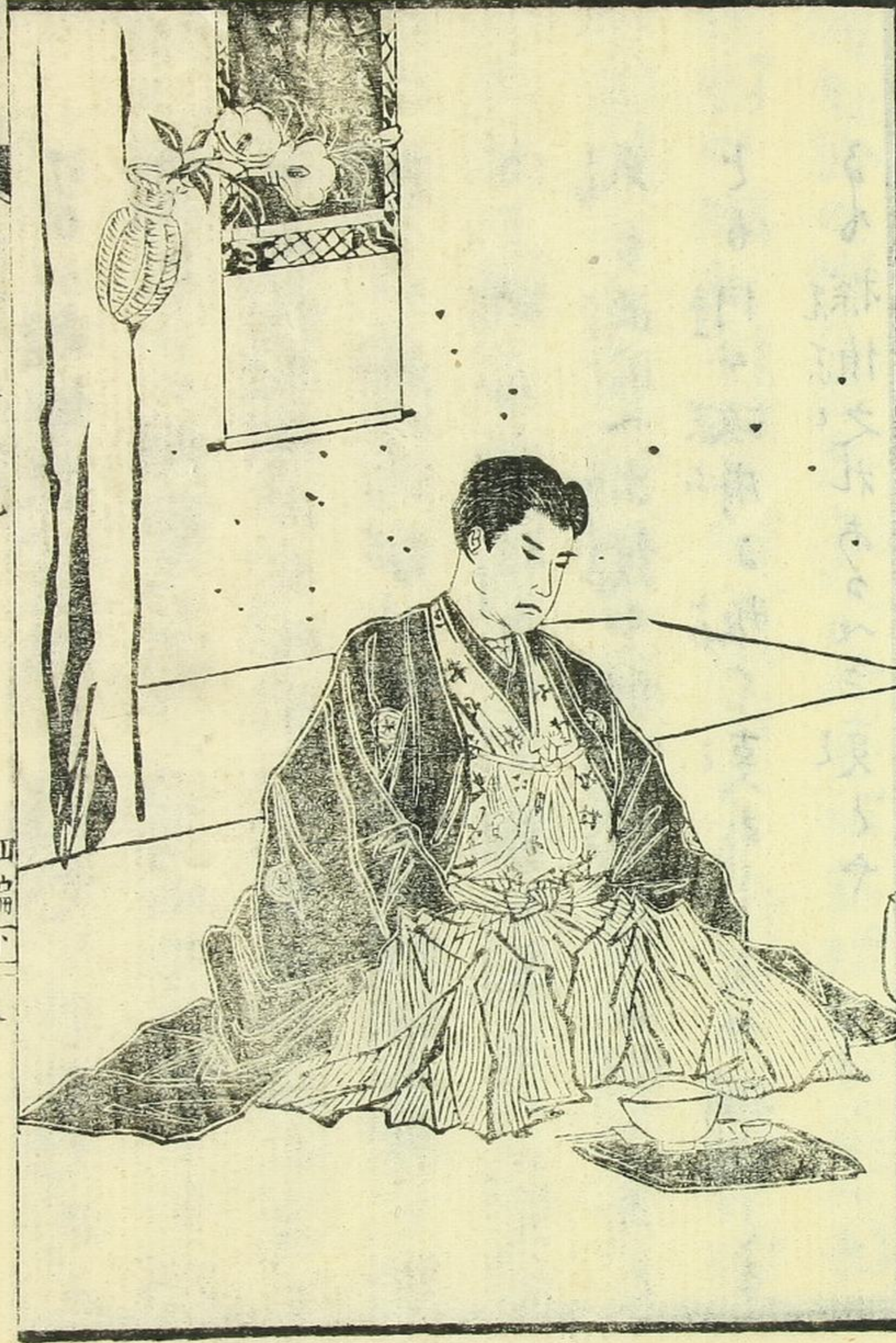
ノ死傷アルモ亦未タ計ルヘカラス然レハ人
 民ノ憂苦ハ論ヲ待タス闔國ノ元氣衰之ヲ
 如何ンセン且暴徒ノ輩他日至當ノ處分ア
 ルモ等シク是レ同胞兄弟ノ數人ヲ斃スノ
 ミ誠ニ遺憾ナラズヤ此ニ於テ隆聚庸愚
 不肖ナリト雖モ身命ヲ國事ニ委シ直チニ
 該地ニ赴キ島津久光ニ協議シ西郷隆盛ニ
 面接シ暴徒ニ黨セシ源由ヲ尋問シ其論

ガヘキ之レヲ論シ其匡スヘキハ之ヲ匡シ其
 審決スル所ヲ具狀シ然ル後チ隆聚別ニ裁
 下ヲ仰グモノ有ラントス是レ固ヨリ不肖ノ
 企及ブベキ所ニ非ルカ如シト雖モ聊力上ハ
 宸襟ヲ安ニ奉リ下ハ人民ノ憂ヲ救ヒ洪恩
 万分ノ一二報ゼントスルノ微表ニシテ隆聚
 生涯ノ懇願ノ如ク允許アラバ幸甚シ目
 今焦眉ノ際至急何分ノ下命ヲ待チ誠恐

謹言

右之願書を差し出され富士見町五丁目の邸と
 出く尾張町一丁目住居より滋賀縣士族白井氏の
 宅ふて不計も高知縣士族島本仲道も鷲尾氏
 も面會あり一と訊く兩名は近邊の會席割煮
 屋ふりたる鷲尾氏の元權妻も當今銀座邊
 小藝妓と勤め一その外二三名と呼揚げて終日
 愉快あり其の夜鷲尾氏の尾張町あり白井の

宅に居られ屢々西国の事件と盡力なさんとい
 て一座の評議中ふ至て俄に角口へ多人数の足音
 不何事やらんと耳だてるは小警視局より一々
 重立たる官員出張し鷲尾氏と直ち馬車ふ
 乗せて拘引され一との支あり
 編者云く鷲尾氏へ普く保元平治の乱に盡
 力あり少納言信西の才智博学あり信西の
 元來天文淵底を究め少納言入道とぞいふ



鷲尾氏舊
妾と招ぶ
臼井の宅
み至る



針火虫

けりが南都落行道にて天変とて大ひふ
 驚き一が又就鳥尾氏へ勇猛の人あるを既
 元弘年間赤松圓心中国義兵の旗と
 飄して両六波羅討ち勝赤松益々威を輝
 う一撰加摩耶山軍勢を集め一就鳥尾
 氏も西国へ出發を願出頻りと盡力へあそ
 ども何々政府に叛く者あらんや拘引とる
 るも探偵之れあるべき莫とや

借も彼の地の三月十六日山鹿口岩村の官軍の長
 野原の外れ車返一坂へ進軍せ一折一も賊徒の伏
 兵忽然として起り砲聲天地と崩すが如く一
 て黒烟の間よりして賊徒何れも抜刀ふる切り
 込もたるよぞ官軍頗ふる苦戦互に死傷夥多しく
 ありしと平山より進こたる一手の賊軍を杉村まが
 追ひ除けしよ一両方の戦ひ午後四時不至て止
 たり又過る十五日官軍田原坂の臺場を乗り

取りしは此日賊軍の此処は進撃したれど官軍
堅固に守護し別隊残りし之を邀撃し互ひ
は比類なき激戦あり終に賊徒を逐ひ退けしり
此戦ひは官軍方にて生捕たる賊徒鳥居巖田
中久太郎等と糾門せしところの口供に貴島の隊
は六百餘人兵を集め又都の城に集りたる兵あ
れども縣令の指圖あり出發を差し止めたりと
り同日出張警視隊の内警部四名巡查十三人

と引率して巡視の爲め黒川村に掛り折しも賊の
番兵に出逢ひ是より砲撃のところで賊六十名計
り矢庭ふその前後を取り圍えたる因て頗る苦戦
爲し居りたるところへ直に援兵が繰り出たり
と同日早朝に賊軍大挙して官軍の本營を眼
下に見下ろす横平山の臺場を襲ひ来り何れも
抜刀にて直に二俣村の本陣に切り入らんと無二
無三に進撃す時官軍の哨兵防ぎか疎く一

時胸壁ニヶ所を奪われたり一以て官軍競ひ
 進んぶ大不激戦一再び之れを取返一ニヶ所の
 胸壁とも取戻したまとも賊軍邀撃一互ひ比
 類多き激戦ふく終に賊徒を逐ひ退けたり此の
 戦ひも双方死傷多しとぞ此の時賊徒山の頂さふ
 ある一ヶ所の胸壁を固守して容易に攻落すこと
 能はば時又参軍山縣陸軍卿より上田永谷等よ
 命トて巡查六十人と二手に分ち午後五時より技

刀に右左右より切り込ませ前面よりの歩兵が奮勇
 進撃し遂に黄昏に至りこまを取り戻し賊を逐
 拂ひたりと實に目覚しき戦ひあり又福岡の総督
 府へ同日久留米へ移さる勅使柳原公の鹿兒島
 巡查百名と臺兵一中隊を残し高島大佐不在留
 せしめ大山縣令の神戸より鹿兒島へ歸縣せしが
 再び柳原公と同船ふく直に神戸へ着たる所
 大山氏の上海御差留あり柳原公の同十六日

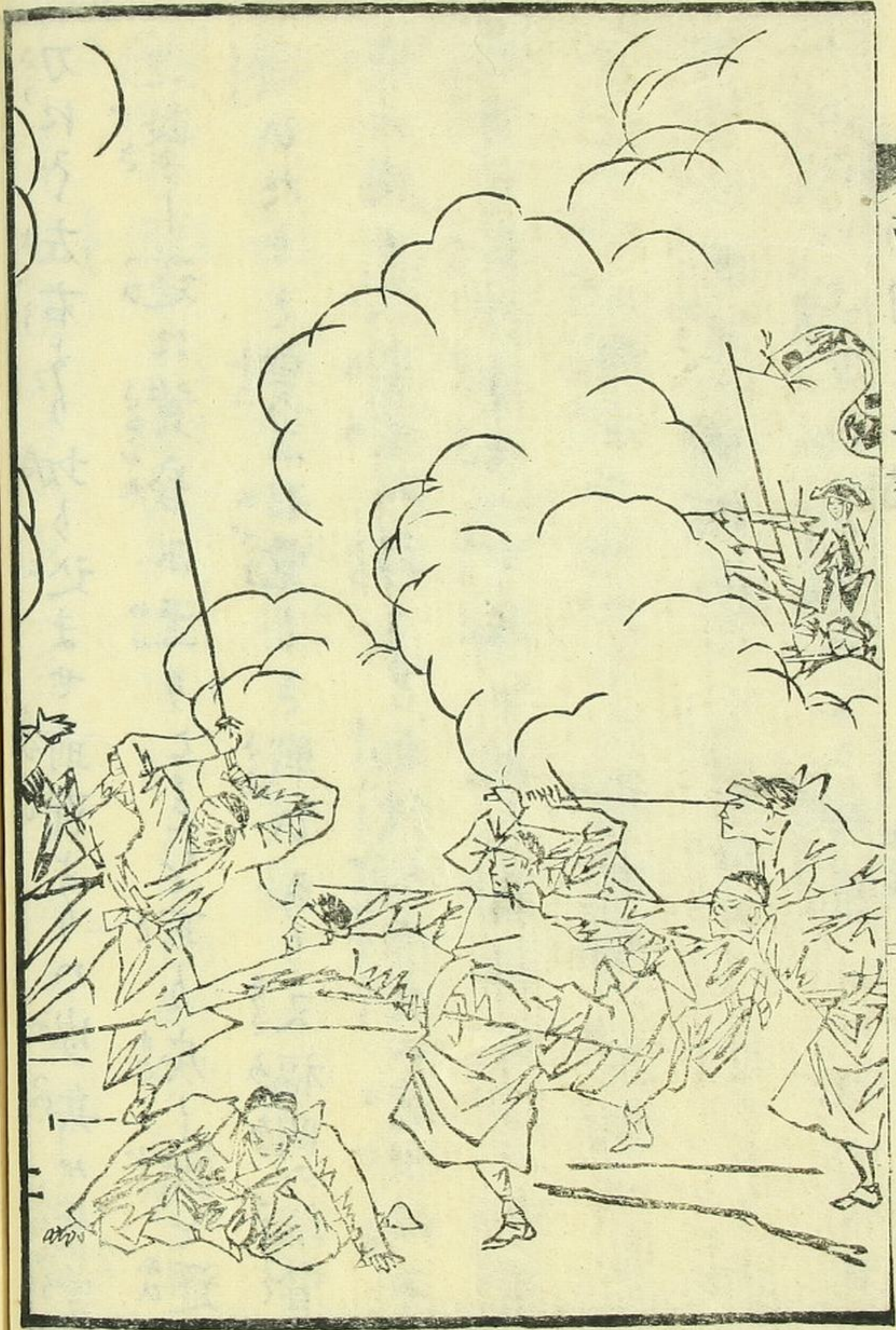
賊軍二侯
 村の本営
 へ不意に
 進撃す

西前二二巴

四編下



西前二二言



西京ふ着して復命せられたり大山綱良の神戸ふ
あいつ彌々官位を褫奪さきと一ツ本月十七日ふ左
の通りの布達あり

行在所第六号 府縣廳

鹿兒島縣令從五位大山綱良儀官位被褫候
條為心得此旨相達候事

綱良の不日東京へ護送して臨時裁判を開くは
横濱へ二十二日ふ入港せし名古屋より上陸して

平服着用し兵庫縣の警部と巡查が四人附そひ同
二十八日臨時裁判掛り玉乃二等判事巖谷六等判
事の尋問あり一後一且大審院へゆじまより檻
倉入りとするよしとす

編者云く女新聞ふ大山綱良の舊稱と格之助
と號し剛膽不屈と以て世ふ稱譽さきとす
一人物より擊劔ふ由達し文久二年戊辰四月其
主島津三郎即今從二位久光公に隨從し

京師けいし不在あり去あの時とき不あ方あつて同藩どうはんの激徒げきと有馬ありま
 新七橋しんしちばし口壯助くちゆうすけ田中謙助たなかけんすけ橋口傳藏はしぐちでんざう弟子丸龍てんし丸りゆう
 助柴山愛治郎すけしばやまあいぢらう森山新五もりやましんご左衛門ざゑもん田中河内介たなかかわちのすけ
 真水まき和泉守わづみのかみ平野ひらの二郎じらう右の人々みぎのひとら復古ふくこの偉業ゐげいごう
 と謀まり大坂おほさかと急發きゆうはつして京師けいしと夜襲やせうせん
 城南じやうなんの伏水ふくみづ不來ききりかむ久光ひさみつ其妨拳事そのぼうけんじと
 誤あまらんまと慮おもんばかりて是これと鎮靜ちんせいせしめん
 綱良つな及および奈良な原喜はら左工門さくもん同幸どうきやう五郎ごらう鈴木武すずきぶ

五郎等ごらうらうらと同所どうじよ不遣つらハ一説いっせつ論ろんせしめん彼等かれら
 固かく執しやくして聞きざるふより其旅店そのりやうてんふおいて悉しつ
 く斬殺ざんせつす爰こゝ不あ於おて始はりて其名そのなと京坂けいさか不あ知し
 らる然しかりしより此方このあた辰たつみの役やく九條道孝くじやうだうかう公こう
 の参謀さんぼうとして奥羽おくう不あ出張しやうちやう一仙臺いせんたいの厄やくと遁にん
 れ佐竹さたけの兵士へいしと誘いざなひて強敵きやうてきの重圍じゆうゐを受け
 危あや険けんと犯かして毫ちとも屈かせず連戦れんせん連勝れんじやうし
 終つひに功こうと奏そうす其勞そのらう苦壁くへき言ことふらふ物ものより為なる

八百石の賞賜あり廢藩の後同縣の權令に任
 ぜられ從五位に昇進し又因て云ふ大山綱良
 へ命を去ると四十年前天保八年酉の春窮民
 救助と名として妨動せし大坂町奉行の組與
 カ大鹽平八郎の男格之助にて其頃幕府の處
 刑よりりしと云ひしが細と洩れ薩州に潜伏
 し後ち姓を改めしと云ふ

鹿兒島にて取り揚げたる器械彈藥ハ蒸氣船二

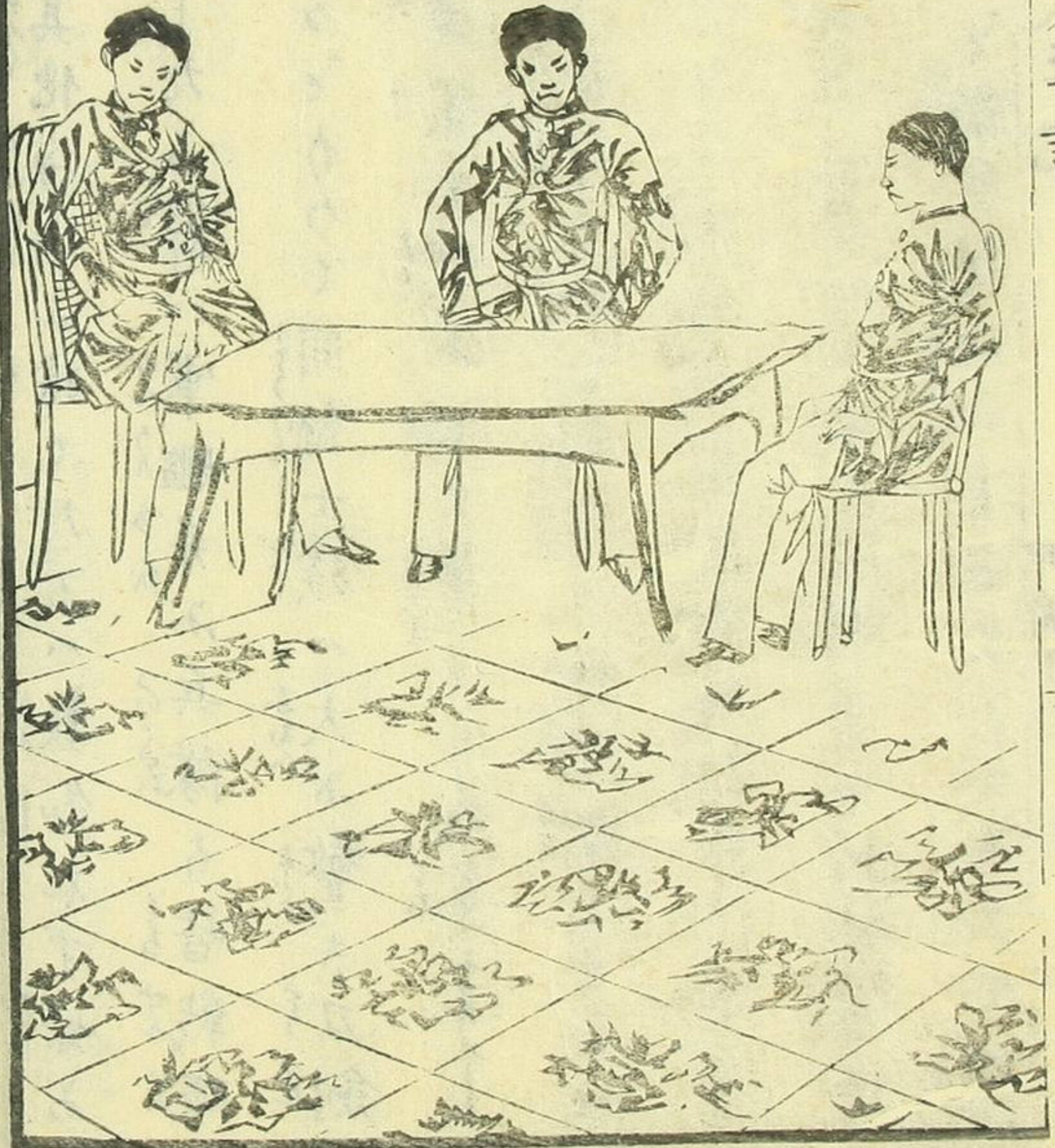
艘小績込と其他海川に捨てたるハ數知れず始め
 勅使が上陸したる節ハ軍艦并ハ兵隊も皆戦隊
 小排列したるをりりて同縣士族ハ大ハ驚き刀劍
 と帶して島津家の門に驅せ集るゝもの多うり
 かと勅使より犯令の罪を縣官に御詰問ありしに
 付一同退散したり又羽前国庄内剛壯の士族が
 九二千程去る二月十八九日の頃より此所彼所
 小屯集し社を結び後田山と云ふところにて開

裁 判 と 開 演
 て 大 山 綱
 良 就 野 小
 就 ぐ



西 南 九 十 三 言

四 編 下 一 六



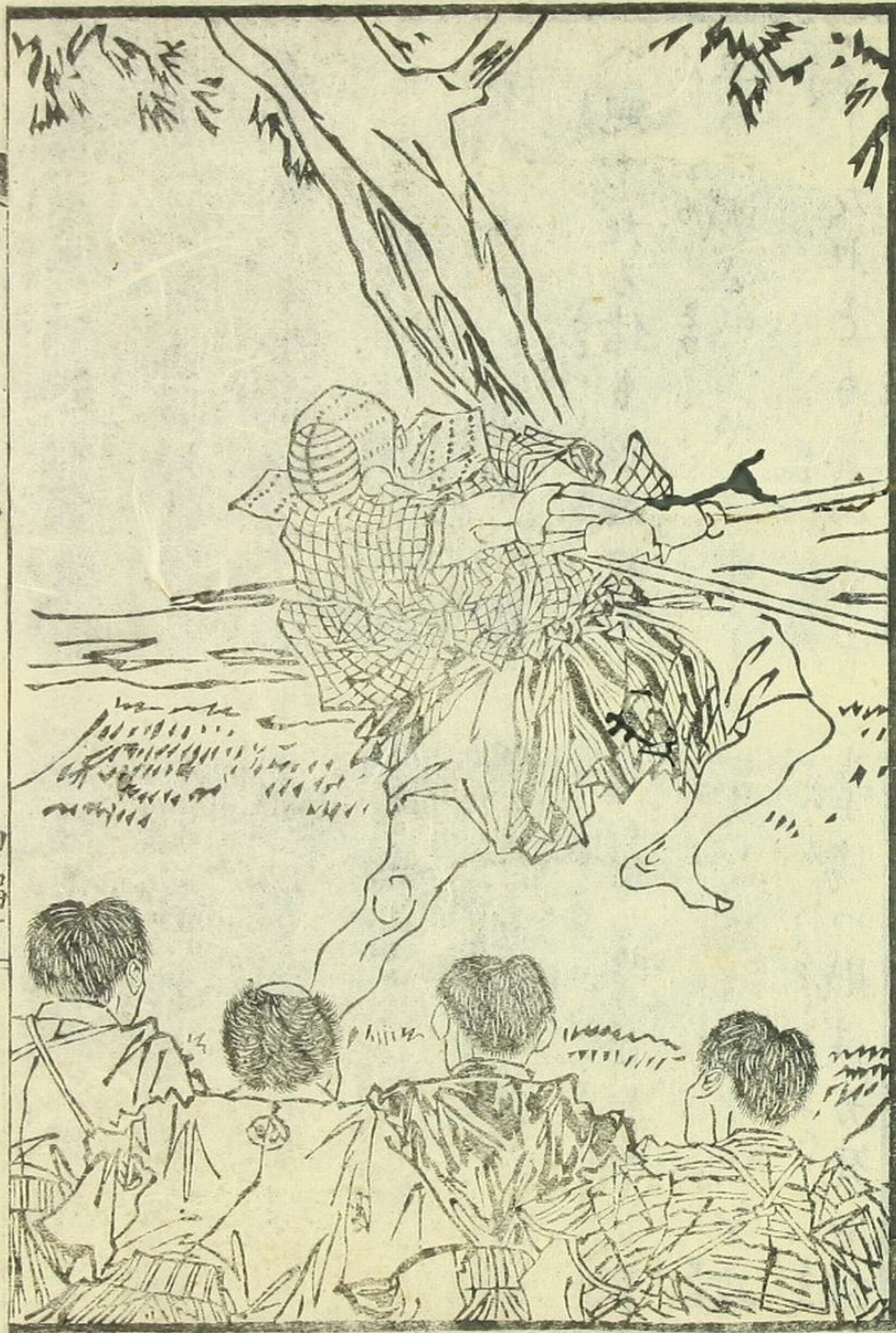
西 南 九 十 三 言

墾小從事一平日ハ箕笠ふる野稼とあり真の
 農民次女ありと雖も其重立たる者の隊伍と指揮
 まるハ全く兵隊の進退驅引ハ異多しずして喇
 叭杯と吹て合圖とる一舊の士族の面目と失し
 ありざりと旨と一事業の暇よて互に競ふて撃
 劍と盛んよ稔昔古して居ると其総棟梁へ曰參事
 松平氏と始め曰開拓判官松本氏其他有名の人
 々にて其組の頭たる者の皆元隊長と勤めし

人ありと又開拓黨ハ平生西郷隆盛と慕ふと神の
 如くありて河れりスナイドルの良銃一二挺づ用意
 一彈藥も丈夫々調ひあり一説ハ薩めて事と奉々
 る所らハ必ず同意せんとの持論ありと其頭取
 る者等ハ近頃其筋へ拘引ふるあり弥暴発しと
 り杯との説蓋一又庄内を維新以來久しく鹿兒
 島と氣脈と通し今現ハ前の如くあるを以て仙
 臺鎮臺の分隊ハ其境を固め内務省よりと奥

羽征討の時参謀より一船越内務權大書記官の
 既み出張せられ其重立たる者ハ現今尋門中々
 りといふ過る十六日あり東京より兵士繰出一ふ
 付仙臺鎮臺歩兵第四聯隊のうち二中隊同五聯
 隊の内二中隊都合一大隊東京警備の爲め至急
 上京すべき旨同日陸軍省より達せられ又巡查
 ハ昨今至急御召募中ふく最早各縣より着京
 したるものもありて其ノ員凡三千人も新募せら

るも今般の事件に付三月十二日迫の御入
 費の概計ハ四百十一万三千圓程にして各人民よ
 りハ其入費の萬分一ハ供せんとして献金或ハ從軍
 と願ひ出る者頗る多りり一儲も陸軍少將曾我
 祐準ハ東京鎮臺の司令長官と免せられ大坂出
 張の命を蒙り同十八日西京丸にて出帆さ
 れ陸軍少將二品親王東伏見義彰宮が司令長官
 と命ぜられ又砲術の達人みて其名海外も傳き



庄内の暴
士族屢沸
騰の色と
頭す



陸軍少佐射的学校長村田経芳の九州へ出張さ
れ十八日午前四時揃よて三等大警部原友行始
め外警部九名巡查三百五十名警視局へ出頭
夫より神戸へ向て出帆一銃器弾薬の同日跡より
遠送せられ兵隊の着替服の菰包二千個も同所
へ廻一たる借も彼地の同十七日の曉より田原坂口の官
軍の呐喊き叫んで追撃一賊軍の臺場二ヶ所を攻
落一たれども其他要害の臺場の賊徒万死と極

めて守るよぞ官軍息ともつらず攻撃弾丸雨の如く
黒烟天ふ漲り勢の破竹の如く攻立けり
是より木留黒川へ官軍進撃二重嶺の戦争
續いて厚倉口より三嶽攻のありつる訳の第
五編よ記載をべし

西南太平記四編卷之下終

西南太平記

四編下 二十

明治十年四月四日 御届
同 十年四月廿三日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

沼尻桂一郎

本石町二丁目

編輯兼
出版人

同

賣捌人

江島喜兵衛

定價廿二錢五厘

010190507632

